
永遠屋

青鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠屋

【著者名】

青鳥

【Zコード】

Z5661C

【あらすじ】

人間がよく使う言葉『永遠』。永遠の命、永遠の美貌、永遠の友情……。実際はあり得ないのに使われる『永遠』。では、もしあなたが『永遠』を手に入れたらどうしますか？

プロローグ 永遠屋

永遠の命、永遠の美貌、永遠の友情……人はやたらと『永遠』という言葉を使いたがりますよね。完全な永遠なんて存在しやしないのに……。でも、もしもそんな『永遠』が手に入つたらあなた……どうしますか？

……「今、自分で永遠なんて無いつて言つたじゃないか」そうですか。私はそんなこと言つてませんよ。私は『完全な永遠』なんて存在しない、そう言つたんです。だから私がみなさんに提供しているのは

『不完全な永遠』です。

それでも買いたがる人は結構いますけどね。『永遠』には勝てないんでしょうね。……「そんなことをしているお前は……誰なんだ？」ですか。すいません名乗り遅れました。私、『永遠屋』と申します。詳しくはこの名刺の裏に書いてあります。どうぞ。

そうですねえ。あなたまだ半信半疑でしょう。私はですね『永遠』を欲している人の前だけに現れるんですよ。あなたにも思い当たる節があるでしょう。「永遠が欲しい……」とか「時間が無限にあつたら……」とか考えていたでしょう。…その顔は図星ですね。話を戻しますが、私は『永遠』を欲している人の前に現れて『永遠』が本当に必要か聞くんです。必要なかつたらそこで終了、もうその人の目の前には一度と現れません。

『永遠』が必要だった場合は日時を指定していただいてその日から先を『永遠』にさせていただきます。そうすると私は目の前から消えます。それで契約完了です。まあ私は契約した人をずっと監視していられるんですけど。

しかし『永遠』を体験して必要ないと感じ返品するなら「永遠などいらない」と考えていただければ私が現れ、確認をとらせていただきます。そこで、必要ない、と答えていただければ契約解除、私は一度と現れません。

……あなたまだ疑つてますね。まあ今までの人もそうでしたがね。それではいつも通りにさせていただきます。

ここまで話しても完全に信用しない方には特例で前回の顧客の『永遠』を借りたときの話をしても良いことになっているんです。特例と言つても今まで使わないで信用していただいた人は数えるほどしかいないので、私の中ではこちらが普通でむしろ使わなかつた時の方が特例と感じていますがね。

……今から話そうと思うんですがね、前回の人、『永遠』を返却してきましたよ。しょせんは不完全な『永遠』ですから……。ですから今から話す話は「結果」より「過程」を聞いてあなたに『永遠』は必要か不必要か決めていただきたいと思います。では話させていただきます。

第一話 決意

ある…中学生くらいですかね、少年がいたんですね。そうですねぇ、仮に…A君としましようか。そのA君にはとても仲のよい友達…大親友とも呼べるような友達がいたんですね。仮に…B君としましようか。彼らはとても家が近く幼い頃から一緒に遊んでいました。ですから同じ幼稚園に入り、同じ小学校に入学し、偶然にも六年間同じクラスでした。そして当然のことのように同じ中学校に進学しました。そこでもまた同じクラス、同じ部活に入りました。そんな中学校生活が始まって二ヶ月位たつた頃からB君が土・日の部活を休むことがたまにあるようになつたんですね。A君は疑問に思いB君に何故部活を休んでいるか聞いてみました。B君は、家の用事だよ、と答えまたA君もそれを信じ氣にも止めていませんでした。しかしそれから十日くらいたつた頃でしょうか。B君は平日の部活まで休むようになつたんですね。さすがにおかしいと思いA君はB君を問いつめてみました。しかしB君は、家の用事、としか言わなくそれ以上なにも言わなかつたんですね。A君はおかしいと思いましたがこれ以上問い合わせても意味がないと思いあきらめました。

そしてそんなことがあつてから一週間くらいたつた頃でしょうか。B君が学校にこなくなつてしまつたんですね。不信に思つたA君は担任の先生を問いつめてみました。その先生は、ただの風邪だ、とだけ言い他にはなにも言ひませんでした。A君も疑つてはいたものの担任の先生の話を信じることにしました。しかしそれから一週間たつたある日の朝のことでした。その先生はクラス全員にこつ告げたのでした。

「B君が入院しました」つて。

A君は驚きが隠せないようでした。当たり前ですよね、風邪だつて聞かされてたんですから。A君は驚き、混乱しながらもその先生に一つ質問しました。何故入院したのか、つて。先生は黙つていまし

たがA君だけではなくクラスの皆さんも同じことを聞き始めたので先生は根負けしたように皆さんに告げました。

……B君、「白血病」だったそうです。これにはうるさかつたクラスの皆さんも一気に黙ってしまいました。特にA君はその日の授業を全て半ば放心状態で受けるほどショックが大きかったようです。そして、全ての授業も終わりクラスの皆さんも帰宅する人や部活に行く人がでてきた頃A君は何かを思い立つたかのように走り出しました。向かった先は「職員室」です。担任の先生なら何か知つているだろう、と思つたんでしょうね。職員室の前についたA君は上がつた息を整えて意を決したように、失礼します、と言つて入り一直線に担任の先生の元に行きました。そしてA君は周りにいる先生方にも聞こえるような少し大きい声でこう言いました。

「B君の入院先の病院を教えてください」

それを行つた瞬間周りにいた先生方の視線が一気にA君に集まりました。A君は気づいているのかいないのか分かりませんがA君は頭を下げる、お願いします、と繰り返していました。当の先生は、ただでさえ言いにくいことなのに周りの先生方の視線が集まっていることもあつて答えあぐねていていた。

そんな時、近くにいた教頭先生が一人に近寄つてきてA君に言いました。君たちが仲が良いのは分かるが教えられることと教えられないことがあるんだよ、そういうとA君に部活に行くよう促し、A君も相手が教頭ということもあつてしかたなく職員室からでていきました。しかしA君は諦めたわけではなく、ある一つの決意を固めていたのでした。

『自分で探してやる』と。

——『自分で探してやる』
そう決意したA君はその日からすぐ行動に移しました。自分の住んでいる市内のすべての病院を調べあげ、その中に白血病治療をしている病院を見つけてリストアップしていき、週末、部活動などのない日にはリストの中の病院を回る。これを繰り返してB君を探していました。しかし、A君は中学生ということもあってなかなか回ることもできずリストに上げた病院を全て確かめたのは探し初めてから2週間たつた頃でした。

しかし……その調べた全ての病院の中にB君はいませんでした。それでも……A君は諦めませんでした。今度は自分の住んでる県内全ての病院を調べ、リストアップしました。今度は検索場所が遠いこともあって設備の良い大きい病院から回ることにしました。大きい病院と言つても県内全てが検索範囲ですからまたすぐには見つかりませんでした。

しかし、県内全てを探し始めてから2週間たつた頃でしょうか。もう探し初めて1ヶ月たつた頃です。A君はとある大学病院にいき、白血病患者が集まっている病棟でいつものようにB君を探していました。B君の名を見落とさぬように目を皿にして個室の前に掲示してあるネームプレートを一枚一枚見て回りました。

そして、206号室のネームプレートに目を向けた瞬間A君は視線をそこに向けたまましばらく動けませんでした。

それは、決して見落としてはならない大事な名前、この1ヶ月探し続けていた名前。

ついに、見つけた。

B君の名前。

A君は手を消毒するのも忘れてドアの取っ手に手をかけ、はやる気持ちを抑えゆっくりドアを開けました。

第二話 いつもの一人

A君が手にかけた206号室の扉。A君は、その先にどんな光景が広がっていても驚かないようじょう、それだけを決めて扉を開きました。

その扉の先にはA君が捜し求めていた人がいました。

B君が。

しかし、そこにいたのは『B君』という事実だけでA君の記憶にあるB君とは違う存在でした。

治療で抜け落ちた髪

病魔に犯され痩せ細つた体

一ヶ月の時はA君の親友を見るも無惨な姿に変えていました。

しかし、A君にとってそんなこと全く関係がありませんでした。

十年以上…共に過ごしてきた彼らはお互いの成長も見てきました。

髪型を変えたのも見てきました。

身長が急激に伸びたのも見てきました。

心の成長も見てきました。

だから—— A君にどうては

「ああ髪型 变えたんだな」

「かなり瘦せたな」

程度にしか感じませんでした。

また、B君も同じでした。

ですから、A君がB君の寝ているベットに近付き、横に立つても変な反応もせず、第一声は

「久しぶりだな」

そんな日常会話でした。

それから一人はお互いの身の回りであつたことを話しました。
いつものように

面白かつたら笑い

腹が立つようなことであつたら怒り

悲惨な話であつたら哀しみ

良い話であつたら樂しく

そこにはあつたのは紛れもなく『いつもの人』でした。

……しかし、病魔は確かに『君の体を一つの方に向いて』いました。

いずれ迎える『いつもの一人』がなくなる世界へ。

それからA君は一週間に一日程度のペースでB君の元に通い続けました。A君はいつも身の回りであつた出来事や最近買ったゲームの話などしかせず、B君の病気については一切触れようとしませんでした。B君に余計な負担をかけたくないなつたんでしょうね。そして自分自身にも言い聞かせていましたからだと思います。

「俺が治ると信じなくてどうする」と。

またB君もそれを黙認していたようで自分からも病気について触れようとせず、A君に心配かけまいといつでも前向きに生きていました。

……しかし無情にも病魔はそんな一人をあざ笑うかのようにB君の体を確実に蝕んでいました。

A君がB君のことを見つけてから一・三ヶ月たつた頃でしょうか。

A君はいつものようにB君の元に行つてくだらない話をしていました。A君は本当にいつも通り話していて、B君も本当にいつも通り笑つて聞いていました。A君もB君も本当にいつも通りそして数時間話し、A君は帰りの電車の時間が近付いてきたので帰ろうとしました。A君が席を立つてB君がいつものようにベッドの上から見送るうとした

その時です。

B君が聞いたこともないような勢いで咳込みました。

すでに部屋をでようとしていたA君は、背後からの聞いたこともない音に驚き勢いよく振り返りました。

A君はそこには広がっている光景に驚きを隠せませんでした。

苦しそうに悶えているB君

赤く染まったシーツ

B君の口から吐き出される、赤い

血

A君はB君の元に駆け寄り混乱しながらもナースコールのボタンを押しました。

第五話 永遠屋

A君の押したナースコールにより数名の看護士がA君達のいる部屋に駆けつけました。

部屋に駆けつけた看護士達は吐血しているB君に驚きながらも、止血を施しつつ数名いた内の一人が部屋を飛び出し、誰かを呼びに行きました。

帰つてきた看護士と共に部屋に入つてきたのは年輩の医者でした。その人を見てA君は、看護士だけじゃ手におえない危険な状態なんだ、と悟りました。

A君が呆然と立ち尽くしている内にB君の血は止まり、A君は年輩の医者に部屋からでるよう促され、病室の前でB君が吐血したときの詳しい状況を聞かれました。

すべての質問を終えるとその年輩の医者は「よく逃げ出せなかつたね 健いよ」と言って病室の中に消えていきました。

A君はその後も暫く呆然と立ち尽くしていました。

すると病室の中から微かに声が聞こえてきました。A君は病室の扉に耳を近づけて部屋の中の会話を聞こうとしました。よく聞くとその声の主は先ほどの年輩の医者と看護士でした。聞いているとその年輩の医者たちは少し焦ったような声でこう言つていました。

「まだドナーは見つからんのか 早くしないと手遅れにならんわ
「しかしどナーを探すには圧倒的に時間が足りません」

▲君はそれを聞いてショックを受け、近くのイスに座り込んでいつ
考えました。

「もつと……時間があれば」

それを聞いて私は▲君の元に現れました。彼は「時間があれば」と
考えましたからね。

▲君は私を見て驚いたように私に質問を投げかけてきました。

私は彼の質問に答えて、先ほどあなたに説明したように『永遠』に
ついて彼に説明しました。

そうしたら彼、田の色を変えて

「本当か!? 本当に『永遠』が手にはいるのか」

そう聞いてきました。私は、不完全な『永遠』なら、と答えました。
そうしたら▲君は、あいつが助かるならどんな『永遠』でもいい、
そういうて私に『永遠』を貸すよう頼み込んできました。

私は彼にいつから『永遠』にするか聞くと彼は、今日からにしてくれ、と言つてきたので私はその日から彼に『永遠』を貸しました。

彼は喜んでいましたが、その先にはもつとつらいものが待ち受けていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5661c/>

永遠屋

2010年10月10日01時13分発行